



吉 田 悦 志

研究課題 明治社会主義と文学の相関

発表誌・発行所 明治大学教養論集

表題 上司小剣

一大正期歴史小説一

梗概 本年度は明治社会主義運動の至近に身を据えようとしながら、ついに歩一步の位相でとどまった上司小剣の、大正期歴史小説を検討する中で、大正文壇史の流れにどう位置づけるかを中心に「上司小剣一大正期歴史小説一」と題して「明治大学教養論集」223号（1989・3・1）に発表した。

大正14年1月、歴史物傑作選集第五巻として而立社から上梓された小剣の短篇集『西行法師』には、大正9年から13年にかけて発表した五篇の作品が収録されている。「石川五右衛門の生立」「三月堂」「死刑」「女帝の悩み」「西行法師」の計五篇である。

『西行法師』を含む、菊地寛『名君』、芥川龍之介『報恩師』、長与善郎『エピクロスの快楽』、武者小路実篤『釈迦と其弟子』、佐藤春夫『李太白』など、シリーズで刊行されたこの而立社の歴史物傑作選集には、誰の執筆にかかるものか不明ながら、注目すべき発刊の辞「歴史物傑作集に就て」という一文が、各巻巻頭に掲げられている。

「新しい精神に依って、新しい態度に依って、新しい立場に依って作られた歴史物」であり、「歴史の中に」、「我々の心のあらゆる姿」を見る。「従って狭小な自分の経験だけに題材を取らうとするよりも、これを歴史の中に求むることは頗る賢明な態度」と言える、という内容を持つ巻頭言である。この巻頭言は明らかに、「狭小な自分の経験だけに題材を取らう」とする私小説主導の大正文壇主流の風潮に対するアンチテーゼを宣言したものである。それは大正13年に「本格小説と心境小説と」を書き、14年には「歴史小説のこと」を書いた中村武羅夫や、13年に「日常生活を偏重する悪傾向（を論じて随筆、心境小説などの諸問題に及ぶ）」を書き、14年に「芸術的歴史と歴史的芸術と」を書いた生田長江らの、反私小説陣営と歩みを同じくする内実を有するものであった。そうした私小説問題と歴史小説問題が大正文壇にあっては同根の枝わかれ現象として表面化していた事情は、あまり論じられてこなかったように思われる。

上司小剣の短篇集『西行法師』も、まさにそういった問題と根を同じくした作品集であったことを確認する作業は、またそのまま小剣文学の本質を解明する場合にもさけて通れぬ重要な論題となるのである。